



日本盆栽作家協会会報

第26号

平成30年10月1日



盆栽は作家なくして作品なし 作品なくして芸術なし

盆栽は、十年手元に持つと、真に自分の「作品」となります。十年といわないまでも、最低でも五年は手元に持つて自分の「作品」として愛情をかけて欲しい。

それくらい心の余裕が無くては、楽しさがわいてこないし、心の眼も、真の審美眼も開けません。

そして、作家としての目的意識を持ち、個性的な作意と創意で作る。そこで初めて芸術たりうるものが誕生するのです。

日本盆栽作家協会は、盆栽界の発展のために真の盆栽の「作家」を育てていきたいと考えています。

第26回作家展

会期／前期

平成29年11月10日（金）

～11月15日（水）

後期

平成29年11月17日（金）

～11月22日（水）

会場／さいたま市大宮盆栽美術館
主催／日本盆栽作家協会

前期



第26回 作家展（作品の説明をする山田会長）



寒ぐみ 鉢：和ルリ釉隅切長方 今井 千春（神奈川県）

この寒グミは3年前に入手しました。当時はふた回り程大きく、幹が細く見えてしまっていたため、切込みと葉刈りを繰り返し行い、ようやく現在の姿になりました。



白玉椿 鉢：紫泥正方 山田登美男（埼玉県）

椿の種類は大変に多いのですが、盆栽界では昔から一重の赤花、そして白花が好まれており、その中でも数少ない「白玉椿」が貴重とされています。椿はあたたかみのある葉形と色彩が特長です。白玉のような品位のある咲き方が、椿の特長によく調和して美しい姿を見せてくれています。



五葉松

鉢：紫泥楕円

米沢 増雄（東京都）

鉢持ち込みと葉性の美しい五葉松です。今年のように雨の多い条件下においても丹精された状態が、双幹の五葉松を引き立てていると思います。

もみじ（出狸々）

鉢：和鉢楕円

吹田 勇雄（宮城県）

この木は15年位前から蔵者と二人三脚で作りました。大きかった葉ばりも毎年追い込んだ結果、まさに形小相大な姿に仕上がって来ました。雑木林の大自然を感じて頂けたら幸いです。





五葉松・銘「素老」 鉢：紫泥隅入龍文正方 須藤 雨伯（栃木県）

盆栽の「気」は作品の根、幹、枝などのリズム運動において現れ、虚実呼応の間に動き、作品の勢いに伴って現れます。作品の線を重視した「気」と、人間の精神文化思想を作品に合わせることは、作品に満ち溢れる「気韻」を成します。



皐月（金采） 鉢：蕎麦釉袋式楕円 塚田 博巳（茨城県）

幹の太さと比較して、太く大きくうねる枝は、自然の力強さとダイナミックさを感じます。皐月ではありますが、雑木の味わいを表現してみました。



五葉松

鉢：祐峰南蛮丸

阿部 健一（福島県）

実生5年生の苗木に曲づけをして地植にし、年数をかけ少しずつ根を上げていき、樹令25年の時に鉢上げして最初の整形をしました。それから更に培養し、24年が経っています。左右の枝の長短のバランス、上下の枝に間をとることで各枝の動き、流れを出しています。姿全体に少しでも自然らしさを表現できるよう常に考えて盆樹に向き合っています。

五葉松 鉢：中国丸 山崎 純一（富山県）

この五葉松は入手当初、根が大きく鉢ばかりが目立っていました。これを小さく整え、正面を変更し、培養してまいりました。今後はより自然環境の厳しさを表現できるように努めたいと思います。





1991年にスペイン・ゴンサレス首相が大宮盆栽村を見学。
ご案内する 山田会長と高木禮二 元高木財団理事長。



協会設立記念式で挨拶する林屋晴三氏
(元国立博物館次長・美術評論家)

盆栽「作家」への精進



日本盆栽作家協会代表幹事

山田登美男

今年も作家展が11月23日～12月5日まで第27回展として盆栽美術館において開催するはこびとなりました。

第一回展は、東京・芝の美術クラブにおいて床の間付き大広間を貸し切り一週間の開催でした。最優秀作品に高木財団賞。そして作家協会賞に各々に副賞として50万円が授与された。但し、審査を担当した常任幹事は賞対象外扱いとした。

私共の一貫した考え方は盆栽文化の向上と作家の育成によって社会に貢献することにあります。

しかし、今日我々が初めて使った「作家」という言葉のみが盆栽業界に定着したのはいささか皮肉なものである。

作家協会たる所以は作家という言葉が入っていることにあります。

第一に作家としての誇りがあるか？

第二に作家としての目的意識が

あるか？

以上が芸術家の資格であり、大切な条件といえる。

作家は、己の作品を発表し、品格の高い作品を後生に残していくことが社会に貢献したことになる。この考えは今でも変わっていない。

私が2002年に雑誌『近代盆栽』の「新・盆栽温故知新」に取材を受けた一部を以下抜粋してみたいと思う。

私の若い頃、この業界は扱う商品は素晴らしいが扱う人（人間性）には改善の余地があると思えばしば聞かされました。また、盆栽名品を芸術という割には国風展などの陳列でも作家名がなく、表示されるのは蔵者名という点は私自身妙に思いましたね。

盆栽作りには、先見力が不可欠です。若木時点で「この樹をどう作ろう？」と考え、10年後20年後、さらには50年後を脳裏に描く。そ

の能力が無いと本物ではありません。やはり自分で姿を作って、これなら社会で一人歩きできる姿だから、誰に買って頂いても楽しめる、楽しいだろうなあというところまでいって初めてその樹が作品化され、名前（銘や作者名）がつく。

あるいはお金になる。それこそが本物の作家で、当然、その姿には作者の盆栽理念や美学・感性、果ては人間性までが反映されることでしょう。

山採り品についても、回し台に乗せてぐるりと一回りさせれば「こしかな正面になりようがない」という正面が見いだせるものです。それが見切れないと正面を変えたり枝の振りを変えたり、迷うことになる。

ただし先見力や「見切る」力は、生半かな精進では得られません。このことに気付いた私は、有志とともに「盆栽作家」を目指す勉強会をスタートさせました。勉強会か

らほぼ10年後の平成3年、日本盆栽作家協会を立ち上げたのもそうした活動の延長で、コンセプト（考え方）として一貫しているのです。盆栽というのは飾ってある樹をちよつと見た程度では本当の良さがわかりません。樹の前に座って長い時間向き合って初めてわかるもの。1時間で飽きるような盆栽はたいしたことがないのです。

そういう盆栽を作るには足し算より引き算が肝心。足し算で作りに上げた盆栽は案外飽きられます。もう一ランク上を目指すなら一旦足し算で作ったものを再びマイナスする。それで初めて本格の盆栽になる。本物の盆栽美や味わいが生まれる。マイナスするのは美学と勇気と精緻な計算が必要です。

三年後には、私共の作家協会は30周年を迎えます。その年には記念として国際大会を開催しようと考えています。



(日本盆栽作家協会常任幹事)
小林 國雄

台湾・玉山国家公園を訪ねて

日本盆栽作家協会の今年の研修旅行は、台湾の玉山に自生している樹齢3千年もあると言われる真柏を見



鄭誠恭先生（前列中央）を囲んで



梁悦美教授（前列左から3人目）を囲んで



阿里山の2700年の樹齢の紅檜

に行くことである。全部で11名もの参加を得た。私の友人である鄭誠恭氏に現地での世話を頼んだ。

私は、彼の「技術と人間性」を尊敬している。彼の園には、古木の盆栽や台湾で60年培養された真柏の素材が庭に植えられていた。また彼は舍利やジンを創るマシンや彫刻刀などの道具も開発している純粋な職人である。27日の夜、阿里山の宿に泊り、翌朝、体力に自信のある若者達7名の「玉山」登山組と「阿里山公園」を散策する私を含む高齢3名とに別行動となった。（玉山登山組の様子は、下段の吹田氏の「玉山登山記」を参照）私達は、紅檜の巨木を見に行った。台湾で2番目に太い樹であり、樹齢2700年の紅檜は圧巻であった。まさに神宿る巨樹であった。私は生命の尊厳に畏敬の念を感じた。

は登らなくて正解であった。故宮を見学した後は、梁悦美教授の招待で昼食をとり、教授の紫園の盆栽美術館の拝見となった。900坪の敷地を持つ美術館で、お父様の代から引き継がれた素晴らしい美術品も陳列されている。教授は、盆栽大師として、世界の盆栽界に貢献している素晴らしい人物である。1300年前に中国で生まれた「盆景」が800年前に日本に渡来し、日本の風土と美意識によって「盆栽」に精華され、今では世界の「BONSAI」になり得た。しかし私が今、危惧している事は、台湾や中国に日本が遅れをとる事であろう。もっと日本の若い作家や業者がグローバルなものを見方をし、勉強して研鑽をして欲しいものである。大自然で生まれ育った樹種の自生地から学ぶ事は貴重な体験になる。

真柏自生地見学 玉山登山記 吹田 勇雄

8月28日朝から登山開始、宿から8.5km先の山荘を目指す。危険な崖を通り山荘到着まで7時間もかかった。翌29日朝2時起床、あいにくの風雨の中、5時半に出発して玉山山頂を目指す。川と化した登山道を進むと真柏の森になった。みんな目の色が変わった。初めて見た真柏の群生地、感動の一言。自然に捻転した様は芸術品だ。上に登る程、木は小さくなり人の背丈ほどになる。頂上近くになると断崖絶壁をチェーンに捕まりながら登る。やっと玉山主峰登頂。標高3952m。気温1度。みんなよく頑張った。私は酸欠になつた為、ゆっくり下山開始。天然真柏を見ながらの下山は格別で、各自脳裏に焼き付けたことと思う。なにより、今回の玉山登山を手配してくださった鄭誠恭先生、本当にありがとうございました。

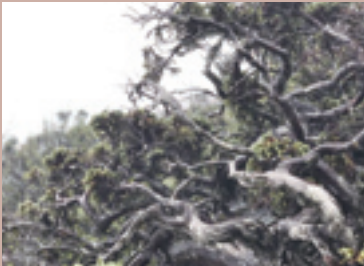
※より詳細な登山記は〈<http://nbsk.info>〉を参照ください。



厳しい崖道を行く



玉山山頂にて



自生している真柏の数々（上、右）





(日本盆栽作家協会常任幹事)
小林 國雄



「第4回 中国風盆景展」

2017年9月27日～10月3日
於中国・如皋市



2017年9月27日から1週間、中国の如皋（ルーガオ）市の「第4回中国風盆景展」に弟子の神康文君と参加した。中国は何度行っても奥の深さに驚かされる。如皋は1000店舗もの園芸業者が集まった村で、政府が支援してくれるシステムもあり、ものすごい規模である。帰りに上海で「日中友好親善」のテレビの収録と雑誌の取材があった。



ブラックシザーズ世界盆栽作家大会

2017年12月6日 於中国・如皋市



9月に同じ会場で行われたばかりなのに、今回は若手の中国ナンバーワンを決める競技大会である。200名の若手作家が参加し、会場には熱気と緊張感がたぎっていた。盆栽の造形美を創る点に

於いては日本はもう負けているだろう。私の一番弟子の吹田勇雄君は技術とセンスを評価され、かなり高い日当を頂いているが彼を必要としなくなるのも時間の問題である。技術や管理培養や鉢合わせ、陳列と飾りなどの精神面などの総合的には多少日本が進んでいるが、中国の盆栽に向かう情熱にはとてもかなわない。日本の盆栽は画一的な規格にはめ込んだ造形的な盆栽だが、中国の盆栽は自然を取り入れた伸びやかで雄大な樹形が多い。読者の皆さまには、各国で勢いを増す盆栽熱に気づいて欲しい。我々は伝統ある盆栽文化発祥地に生まれたのだ。私はこの揺るぎない誇りを胸に、今日も世界の空を飛ぶ。

第40回GSBF盆栽大会

2017年10月25日～30日
米国カリフォルニア州

第40回GSBFの盆栽大会にメインゲストとして招かれた。アメリカにおける盆栽の草創者はジョン・仲氏であるが、彼の死後、盆栽のレベルの進歩と発展はあまり無いようである。私が感じるアメリカの国民性は、盆栽における美的意識よりも盆栽愛好家同士の交流を楽しむことが主体であるようだ。

熊本県から来てこちらに永住している島津孝士さんが真柏の自生地へ案内してくれるので、東京都の約



ジョシュア・ツリー国立公園の真柏自生地

1.5倍の面積3196平方キロメートルの広大なジョシュア・ツリー国立公園へ車で向かった。砂漠地帯を通り抜けると奇岩の巨礫の山が神秘的な景色をただよわせていた。車から降りると目の前に樹齢千年もあるような真柏があらこちらに生えていた。

「クレスピーカップ」

2017年9月13日～17日
於イタリア・ミラノ

イタリアの「クレスピーカップ」に招聘され、妻と二人でミラノに向かった。クレスピー盆栽園の広い園内が会場となり、会期中に2万人近い入場者があると聞かされ驚いた。確かに始まる多くの人で賑わい、まるで国風盆栽展を一人で開催しているようだ。

あるのはまだここだけである。クレスピーはなかなかの事業家である。私のデモンストレーションは一位の山取り素材を改作した。アシスタントに日本盆栽作家協会ヨーロッパ支部のエドワルド・ロツシーが助めてくれた。

私は盆栽と水石の審査とデモンストレーション、ワークショップを任された。そして出品参加者の入賞、入選賞に私のサインを300枚近く書いた。世界に盆栽大学が



クレスピー盆栽園内の大教室に多数の受講生が集まった

作家展主旨

本協会が主催する作家展は、生きた伝承芸術、盆栽作家の精神高揚と高度な盆栽美を作出することにあります。

盆栽作家は人間性の豊かな感性を磨き、自然愛を基本とした芸術を作品に表現されることが、最も大切であり、お互いを研鑽し合い、盆栽文化の一層の発展を切望するものであります。

しかし、盆栽作家をめざす条件は大変に厳しく、自然との調和を図り、永い修練の中から体得し、その積み重ねから美の心を包含する作業であります。今日の作家群が明日の社会にクリエイティブなボンサイ・アートとして、環境保全等に貢献できることを期待いたします。



第26回 作家展 後期

黒松・銘「翔鶴」 鉢：紫泥外縁長方 小林 國雄（東京都）

入手した際は、樹冠がかなり右側に大きかったため、左の一の枝の流れに合わせて植え付けの角度を少し変え、空間と流れを創り出し、個性を生かしてみました。2000年の「第74回国風展」に出品し、満点で国風賞を受賞した名木です。



安倍総理大臣、大宮盆栽美術館を訪問!!



平成30年7月4日、安倍晋三首相が初めて大宮盆栽美術館を訪れました。

ご案内は当協会会長で美術館の管理官である山田登美男が担当しました。

祖父の岸信介元首相の愛蔵された貴重盆栽第一号の「かりん」や「いわしで」と世界盆栽大会招致の記念盆栽「五葉松 銘：輪の舞」そして日本一の「五葉松 銘：日暮し」の前では特に時間をさいて楽しいひとときを過ごされました。

「Sakka Ten 2018 Spain」

2018年 11月2日～5日 スペイン/アルカラ・デ・チベルト

<https://www.facebook.com/SAKKATEN>



平成30年8月14日 日本盆栽作家協会ヨーロッパ支部のスペイン支部会長 チャビさん一行が来日され、「Sakka Ten 2018 Spain」についての協力を要請されました。

当協会本部より、山田会長、秋山実、会長秘書の3人を講師等で派遣することになりました。

前回のスペイン大会の模様を紹介した現地の新聞



長寿梅 鉢：海鼠外縁長方 福舘 治（岩手県）

この長寿梅は、恩人の趣味家が長年持ち込んだ樹で、私が入手してから更なる樹格向上を目指し、左の一の枝を伸ばし、左への流れを強調しようと培養しています。引き締まった印象を出したくて、海鼠長方鉢を合わせました。



五葉松 鉢：和長方 馬場 守一（群馬県）

この五葉松は、ある程度の樹形は入手前から完成しており、私自身が苦心した点は特にありません。時々眺めたり、手入れ作業をしたり、楽しみながら作っている一点です。



五葉松

鉢：和長方

秋山 実（山梨県）

この五葉松は、戦後に産出され、山採りからおおよそ70年間にわたり鉢で培養されてきたものです。自然の摂理で主幹の下枝は枯れ落ち、作り込む前に、すでに文人木の素質を形成しておりました。自らの重みによって枝が下がる自然の様を出すように心掛け、作り込めました。枝先も自然の風合いが出て、五葉松独特の柔らかさが出てきたと思います。

寒ぐみ

鉢：朱泥丸

菊岡 成泰（奈良県）

寒空に銀色の小さな目立たない花が微笑ましい姿で輝いています。やがて4月から5月上旬頃に赤色の実が花よりも大きく美しくなると、野鳥がやってきます。実を鑑賞するのが通例ですが、盆栽界では「寒ぐみ」と呼んでこの時季の姿を楽しんでいます。





花梨 鉢：和楕円 松田 大実（神奈川県）

株立ちの花梨で、取木仕立てで35年になります。ようやく小枝も密生して鑑賞して楽しめる姿になりました。今後は根張りもできて大樹の花梨になることを楽しみにしております。



石榴（ざくろ） 鉢：東福寺緑釉長方 矢内 信幸（大阪府）

石榴でこんなに伸び伸びと鉢持ち込みされた盆栽は今日では大変に珍しいと思います。図柄が文人風の古色で晩秋の美しさを感じます。特に人気の東福寺鉢との調和が盆樹を引き立てています。



オリーブ 鉢：緑釉長方
風間 雄一（千葉県）

イタリア原産のオリーブの盆栽です。蔵者の長い丹精により、年々と樹格を上げています。ここまでの実成りは近年になく、秋の深まりとともに成熟していくオリーブの実、イタリアの原風景を想像させてくれます。



荒皮もみじ

鉢：紫泥外縁隅切雲
足長方

岩城 哲也（東京都）

荒皮もみじでの文人木は稀であり、立ち上がりから小枝に至るまで細かくやさしい線を描いています。短冊型の鉢に合わせる事で、左に大きく空間を取り、左に流れる樹姿との調和が図られています。

